

東嶽宮地殿夫の玄学研究

——主著『本朝神仙記伝』を中心として——

小林 健 三

序 論

明治神道界にはいくたの偉才が輩出して群をなし、自己の信念から教派神道の各派を特立して、教義と実践の両面にわたってふかく民衆のなかに根をおろし、その遺風を現代に伝えた。

この中で大立者といわれたのが、大社教の組織者千家尊福であったことはよく知られている。彼の真面目は最近、藤井貞文博士の大著『明治国学発生史の研究』によって明かにされた。

ここでは平田神道の玄学方面を継承して、明治後半期、皇室の祭祀に通暁するとともに、公爵会の講演を通して華族社会に畏敬され人気を博した元宮内省掌典東嶽宮地殿夫の神道、とくに玄学についてふれ、大社教の千家尊福と双璧をなす大物であったことを顕彰することとする。主著『本朝神仙記伝』（十冊）は翁没後十周年記念に昭和三年・四年と二カ年にわたって大阪の本朝神仙記伝発行所から刊行されたが、頒布の部数が少なかつたせいか、一般神道界にはあまりよく知られていない。今日では稀観本となつて、無窮会神習文庫にも収録されていない。博識を以て鳴つた

加藤玄智編『明治・大正・昭和 神道書籍目録』（下巻）にも載っていない。翁の伝記についても、昭和十五年版平凡社の『神道大辞典』には全然記事なく、ようやく昭和四十三年刊堀書店版『神道辞典』（人名・一二二ページ）に十三行の記事があり、初めて本書の名があげてある。明治神道史に詳しい阪本健一氏の執筆であるが、ここでは単に「神仙記伝」となっていて「本朝」の二字が脱落している。

さて、昭和三年刊行の『本朝神仙記伝』（上）の序文は、神道管長神崎一作翁の執筆であるが、これを読むと、翁が道教研究不振の神道界に対し、深い憤りを抱いていたことがわかる。今ではこの時代を証明する歴史的文献と思うので、その一部を引用しておく。

神仙は支那道教の主として説きたる所、周に起り秦に伝り漢に盛にして爾來愈々隆昌を極め、方士輩出し祠廟簇起し、これに関する研究は博洽詳密、典籍亦汗牛充棟畜ならざることは、彼の道藏経の浩翰無比なるに徴しても知らるべし。

この学わが国にも伝りたれど、これを研究した人鮮く、専らこれに力を用ひられたるは、平田篤胤翁にして、これを後にしては翁の学を承けたる宮地殿夫翁その人なるべし。翁の学は本平二家に於ける古神道の正統を伝へ、学に篤く所信鞏く、入りては宮中の祭儀式典に参画してその事を親らし、出でては神社及び各教団の指導に膺りて淳々倦む所を知らず。或は著述に、或は講演に、孜々として寧日なく、その間特に精力を注いで研究せられたるが即ちこの本朝神仙伝にてありき。

惟ふに彼の道教は一にこれを哲学文学の上より研究すべく、或は又これを生理及び精神科学方面より研究すべく、若くはこれを医療薬物の上よりも考査すべく、世上未だ此等の各方面に研究の手を染めざるは、知らずして為さざるか知るも故らに為さざるにか。世上有識の士もし何れかの一方より進みて深くこれを究むるに於ては、蓋し大に獲る所のもの鮮からざるべきか。

余は思ふ、この書記す所、本朝神仙のことなれど、翁は実にこの書に藉りて斯学の一斑を示し、その研究を促されたるものにして、或はこの書を以て翁が好事の余技に成れるものとするものあらば、そは実に翁の心事を解せず、又以て道教の更に大に攻究すべき所のもの有るを知らざる者と謂ふべし……。

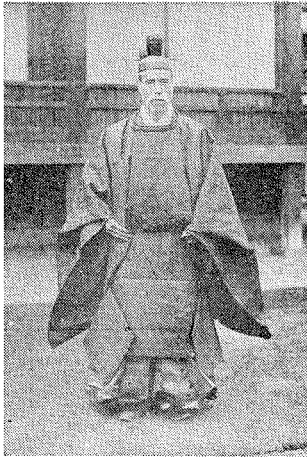
これを要約すれば次のようになる。

神仙はシナ道教の主眼とするポイントであるが、わが国では従来この研究者が殆んど無く、これを専攻したのは平田篤胤翁が最初であり、つづいて平田学派の宮地巖夫翁が第二の研究者となる。

宮地翁の学は、本居・平田二家の「古神道」の正統を伝えたもので、その特色は掌典として宮中の祭祀に参画するとともに、ひろく宣教のため神社や各教団の指導にあたったことにある。このため著述・講演に活躍されたが、その真骨頂はライフ・ワークである『本朝神仙記伝』に見られるのである。わかり易く図式化すると、翁の学は、

(一) 古神道(本居・平田二家の国学)

(二) 玄学(宮中の祭祀と平田の玄学方面を継承するとともに、さらに純粹化していること)ということになる。



晩年の宮地巖夫翁真影

シナ道教の研究は、戦前に思想史あるいはいわゆる儒仏道三教関係史の立場から開発が行なわれた。東洋史専攻の諸学者津田左右吉・常磐大定・小柳司氣太博士らの研究が見られる。しかし道教そのものに立入って内部からこれを構造的に探究した学者の文献は極めて少ない。従ってその本格的な研究はやはり戦後の学界までまたねばならなかったのである。戦後、日本道教学会が生れ、それがさらに国際道教学会にまで発展し、「国際協力による道教の総合的研究」を共通テー

マとして研究会議がもたれるようになったのは、一九七二年（昭和四十七年）つい最近のことである。こうした状況に立って、平田翁・宮地翁の業績を再検討してみようとするのが本稿の目的である。

二

さて宮地殿夫の玄学とくに神仙道に迫るためには、残された肖像や数多くの講演・著作類の根本史料に目を通し、これらを統一する人間像をそれ自体に向って集中思考を重ねねばならない。人物研究は時代を遡るほど難かしいが、明治の先覚についても、その人物に直接接し対話された弟子を通して、その真に到達することが辛うじてできる。弟子は師の学風をよく伝えるからである。

これについて二人の先学をあげることができる。第一は同じ宮地家の宗族にあたる神祇史の大家宮地直一博士である。『本朝神仙記伝』下巻の跋文にその印象の記録が見える。

「予の宗族宮地常磐・堅磐父子の翁は、神仙の道に通じて造詣頗る深いといはれ、門人の数も尠くなかった。中でも堅磐翁（後に再来よりきと改名）は予の幼年の頃まで生存されたので、屢々膝下に侍して仙術に関する奇談を耳にし、子供心にも非常に不可思議に感じた記憶は、今にありありと脳底に潜む。

その初め堅磐翁の流れを汲み、後に独创的境地に進んで、遂に一家の説を打立てられたのが即ち殿夫大人である。大人の斯道に関する造詣に就いては、固より予輩の如き門外漢の彼是といふべき限りでないが、回顧すれば明治三十八年の秋東都に遊学することとなり、爾来屢々永田町山王台下のお宅に伺った際、いつも話題の一とされたのは外ならぬ神仙譚で、折に触れて、仙人の實在する所以や幽界の神秘を物語る片端を諳々と説明かされたあの温容は、今も尚ほ目前に彷彿たる気がするのである。

大人の斯道に関する著書の中最も心を籠められたのが此の本朝神仙記伝である事は、内外の等しく認めるところ、

それにつけても故乃木將軍が時々借用されたことや、吉川半七氏に命じて清書に従はしめられたこと等、親しく大人から承った挿話の数々は頗る多い。中にもある年、秋の夜長の折柄、或は本文、或は按文の一節をさも愉快氣に朗読して聴かせて下さつたことは、予にとって最も思出の深いものの一つである。」

この一文は昭和三年九月執筆されたものである。宮地博士は内務省考証官として考証課長兼東大神道講座の講師をされていたころである。終りに「斯道に關し何の経験をも持たない吾々如きは、固より本書に就いて云々すべき限りのものでないが、ただ親戚の一員とし、又生前恩顧を蒙つた者の一人として、最初からの因縁を感じるの余り一言巻尾に筆を染めさせて戴いた次第である」と断っている。

因みにいう。土佐高知に通称宮地御三家と呼ばれた名門の三家がある。その宗族潮江天満宮の祀官たりし潮江宮地家と、城内八幡宮の祀官たりし宮地伊勢守重岑（宮地嚴夫はこの伊勢守に見込まれて養嗣子となつた）。次が宮地直一博士の宮地家である。この宮地三家の家格は土佐藩でも一目をおかれて別格と見られ、宮地伊勢守が従五位に叙せられたときは、もう一階進めば藩主と同格になるといふことで騒がれたという逸話が伝えられているといふ。

三

第二は元宮内省掌典星野輝興氏である。星野掌典は明治十五年の生れであるから、師宮地嚴夫掌典より三十五歳の後輩となるが、輝興氏は嚴夫大人を師匠として祭祀の学を学ばれ一家の説を樹立された先学である。わたくしは昭和三年、四年のころ、内務省神社局に在勤時代一度お目にかかったことがある。当時、氏は大礼使事務官として多忙の身であったが、依頼原稿の催促に宮内省に伺つた。お会いすると、今かきますから暫くお待ち下さいとのことで、約二時間、執筆される傍で待った。太い万年筆を使用され、原稿用紙にぐんぐんかいていかれた。やがて脱稿されたのでお礼を申して神社局に戻つた。当時四十五歳の働き盛りであつたが、氏の論稿はそのころ定評があつたのを覚えてい

る。昭和十七年六十歳で退官されたが、同三十二年十月長い闘病生活の末帰幽された。七十五歳であった。わたくしは広島に長くいて帰京したのが同三十七年四月だったから逝去のことを知らなかった。同四十二年十月十年祭が行われ、そのさい遺著刊行会が結成され、翌四十三年七月A5四一頁におよぶ著作集が『日本の祭祀』と題し、遺著刊行会から刊行された。巻首に遺影として一枚写真が載っている。掌典時代の面影を示す貴重な写真だが炯々たる眼光には、見神、通神の道に達せられた趣きがよく窺われる。

四

宗族の宮地直一博士はさきの『本朝神仙記伝』の跋文にも見える通り敵夫翁とは昵懇であったが、その仙術については「門外漢」としてふかく触れられていない。宮地博士の専攻は神祇史であり、戦前昭和十六年十二月公けにされた『神祇史大系』（明治書院版）がその学の本領を示している。

しかるに星野輝興氏は、敵夫翁の直弟子としてその教えをうけて大成された掌典であった。その師匠宮地敵夫翁について語った文章が昭和七年の国学院雑誌（平田篤胤特輯号）に発表の「平田翁最後の御目的」と題する論文に見えらる。（この特輯は平田翁九十年祭記念に発行されたもので、斯界の二十一氏の論文を取めたもの、この中で星野氏の論文はわずかに三ページにすぎぬ短論文だが、師匠宮地敵夫翁の学を語ってその真実に迫る歴史的的文章である。）これを七段に分けて考察する。

(一) 平田翁の最後の御目的は何であったか。鉄胤先生が「玉釋」の末の年譜に記されたものに依ると、「古史伝」がそれで、自余のものは、凡てこれが為のものであったといふことになってをる。さうしてこの見解は、単に鉄胤先生御一箇のものでなく、御門下一統のものとして差支ないと思ふ。それは翁の没後、御門下の首脳連が、古史伝の完成に全力を注がれたのでもわかるからである。

(二) ところが自分の師匠の宮地敵夫先生は、この首脳連とも交渉はあった方であったにも拘らず、最後の御目的に

ついでには、全然異なつてをった。即ち師匠がいはれるには、翁の最後の御本意は、靈的生活の無限の向進であつた。それは赤泉太古伝を主にして黄帝伝記、天柱五嶽余論、葛仙翁伝から、更に葛仙翁の文粹までものせられた一面、仙境異聞、勝五郎再生記聞、神童憑談略記、七生舞の記、霧島山幽郷真語、稻生物怪録を著はされたといふこともあるが、平田家二十五部秘書の一である密法修事部類稿の末にある久延彦の伝の如きは、他の御著述からは想像もつかない大がかりの靈の御実修であるのでよくわかる。で自分はこれが翁の最後の御目的であると同時に、之が平田学の正系である、と信ずる。然るに多くの学者が之を悟らず、此の方面を継承せんとするものなのは、実に遺憾である。故に身不肖なりといへども、翁の真意を体して之を發揚せんとする。でをこがましくはあるが、自分こそは平田学の正系で、しかも唯一人の継承者と確信してをる。汝亦吾が意を体せよといふことであつた。

(三) 師匠がかくいはれることになつたに就いては、御一族に宮地、堅磐といふ方がをられ、靈界によく通ぜられたといふことも一因をなしたものと思はれる節もあるが、とにかくこの点非常な確信を持つてをられ、以上の如きお話があつたばかりでなく、御著述からいつても、後継者を以て任ぜられたものが頗ぶる多い。

例へば其の内の「国家学談」の如きは、正に翁の方学一握り式のもので、「祭天古俗弁義」は翁の意気を再現されたもの、「世界太古伝」は未定（完か）ながら赤泉太古伝の精神を伸張せんとせられたもの、「本朝神仙伝」は翁の靈方面の御本意を学問と実地とで明らかにされたもの、若し夫れ葛仙翁の抱朴子の「地真卷の积義稿」に至つては、赤泉太古伝と天柱五嶽余論と葛仙翁伝及文粹の結晶これなりといふ意気込のものであり、更に翁の最後の御目的に端的に突込んでいかれたものは、「神道要領」を手ほどきにしての、「自修鎮魂法要訣」であつた。否其の実修であつた。

平山省齋氏の修道真法に、「天神憫之、授饒速日命、以鎮魂神法、曰唱一二三四五六七八九十百千万六言四句祝

文、誠禱則有死人亦蘇生之靈驗矣、大岳翁、亦晚年深信、示入室徒弟、以唱斯文数千遍、以精祈、且誠勿妄示常人」といふことが見えてをるが、翁は意外にかういふ方面に深く進んでをられ、相当あがかれたと思はれると同時に、師匠の主張が万更師匠一個の見方でないといふことも窺はれるやうな気がする。それに物の道理からいっても、苟くも神道を云々する以上、事茲に至らなくては納まらぬものと思はれるばかりでなく、翁の如き物の究極を掴まないうちは止まない方、たとへば道儒仏の究明だけで満足せず、遂に二十五部秘書の一たる自鞭策にまでいかれたといふこともある位であるから、靈界方面のことも、其の編述だけでは満足が出来ず、事茲に至られたのは、実に当然すぎるほど当然のことと思ふ。

(四) 然し自分は此靈的生活の無限の向進を計られたのみが、翁の最後の御目的であつたといふ師匠の御意見に同ずるものでない。何となれば、久延彦の伝式の靈的生活の完成も確かに最後の御目的であつたには違ひはないが、古史伝の完成といふ事も確かに最後の御目的であつたからである。是をわかりよく極言すれば、翁の事業の結果からは、国境を認めない靈的生活に深く踏み込まれたが、其の一面に純日本人としての心的生活の徹底を期せられたからである。

(四) 然らば最後の御目的はこの二つであつたかといふと、結果からはそれに違ひがないが、翁の御気持は、之を二つとは見てをられなかつたと思ふ。否一であると思つて進められたところが二つとなつて現はれ、しかも其の二がいづれも未完成であつたばかりでなく、両者を一つにししようと焦れば焦るほど、隔絶し、矛盾し、果ては葛藤が生じ、おまけに日暮れて道遠しといふ実情とあつたので、可なりいらだたれあせられたやうである。

彼の未定稿本、就中門外不出の二十五部秘書といはれたものうちには、この点が余りにも歴然たるものがあつて、実に涙なくしては拝見が出来ないものがある。翁がこの世を去り給ふに当り「思ふこと一つも神に務めをへず、今日やまかるか惜らこの世を」といふ御辞世をおのこしになつたが、これは決して謙遜でもお世辞でもな

く、其の当時の御心中を如実にお詠み遊ばしたもので、自分は上述のことを回想する毎に、この御辞世が思ひ出され、胸が強くうたれる。

(内) さうしてこの事は、独り翁に見るばかりでなく、本気にやらうとする神道人の常になやまされる問題である。現にかくいふ自分も、師匠との間に、この二について彼此があった。といふのは、師匠によって靈的生活の向進が或程度に進んだ時、自分に一の疑問が出た。お互日本人はこれだけでよいのか、これから師匠と自分との間に、少々経緯が生じた。ところが師匠が帰幽に当り、

「天地と共に榮えむ大御代を いはひまつりてゆくがたのしさ」

といふ辞世を残されたので、思はずわかりましたと頭が下がった。けれどもこれは兩者の結論だけで本論ではない。肝心の本論はとうとう何ふことが出来なくなつたと気がつくと、一瞬の歓喜はやがて永恒の失望となつたが、間もなく、この論をどう説くかは、師匠が自分に残して呉れた課題であると思ひ直して、今にこの開拓に汗みどろになつてをる。

(出) だが、よく考へると、之は師匠が自分に遺して呉れたものであるばかりでなく、既に翁が一般の神道人に残されたもの。なほいふならば、神が日本人全体に課せられたものであった。この国民としての心的生活と世界人としての心的生活、この兩者の綜合・調和。それが成る成らぬは、世界の日本か、日本の世界かの分れ道である。

(昭和七・八・七)

五

この論文の主意は、門人の主脳たちが古史伝の完成に全力を注いだし、それが事実であつたとうけとられるが、師匠の宮地殿夫はこれを採らず、玄学を主とする靈的生活の無限の向進こそが篤胤の本意であり、この領域の継承こそ

平田学の正系と目すべきである、と主張した点にある。

宮地殿夫の著作を通覧すると、この星野論文に指摘された通り、平田翁の万学一握り式の規模がよくわかる。篤胤の赤県太古伝の精神をさらに展開した『世界太古伝実話』（未完）、それと主著『本朝神仙記伝』（上下二巻）『抱朴子地真卷釈義稿』（未発表遺稿）などの著述は明らかに篤胤の玄学の継承・発展を物語るものであるが、それへの導入として『神道要領』をふまえた『自修鎮魂法要訣』の実修という方法論があるのはその学のキイポイントを示す。

これらから推論されるのは、宮地殿夫の学が師匠篤胤の万学一握り式の学風を最もよく継承し、いわば篤胤の生れ代りの観を呈しているともみられるが、ここで思いだされるのは高知在住のころその宗族にあたる潮江天満宮祀官宮地常磐、堅磐父子の感化影響を強くうけられたのではないか、という推測である。

堅磐（道号水位師仙）は宮地家家牒に自ら「再来」と誌している。嘉永五年（一八五二）の生れであるから、殿夫より五歳上の先輩となる。稀に見る神人と申してよい。十二歳で祀職をつぎ、十三歳神祇管領卜部家の許状を得て仕官し、宮地若狭佐菅原政昭と名乗った。慶応三年十六歳藩校致道館へ入学、その年『勸懲黎明録』を著わした。のち藩校が廃校となるや、殿父常磐は数万冊の図書を入札購入してこれを勉学の資料として与えた。当時宮地家には土蔵に入れた貴重道書の外、書斎から神殿に至る廊下まで本箱がずらり並んで足のふみ入れ所もなかったと伝えられる。蒐集書の大部分が道書仙経の類であり、とくに百二十二巻の「雲笈七籤」「墨子枕中五行記」「淮南鴻宝万畢術紀」「雲笈道蔵異本」などの貴重書は絶品と申してよく、堅磐はこれらに全部目を通し、「韋編百度絶つ」と誌している。この外、諸国遊歴中に得た符図類も数多いといわれるが、これらを集成して自ら玄学の学統を体系づけたわけで、著述十等身といわれる膨大な著作は、二十歳から四十八歳までの二十九年間の研究の成果を示すものである。その代表作が『異境備忘録』であることはよく知られており、神仙道の經典として尊重されている。

平田学との関係は、堅磐の殿父常磐が平田学派の門人倉沢義随の紹介で正式に平田家没後の門人となったことに注

目すべきである。慶応四年四月二十一日のことで、平田家門人姓名録に見える。こうして、宮地家に平田学の学風が導入されることとなった。これが平田学派の中で、玄学を継承して神仙道の深化に進む一派が形成される遠因をなすが、この道を研鑽すること三十年、これに組織を与え、一家の説を確立したのを東嶽宮地殿夫方全大靈寿真とする。

あとでふれるが、宮地殿夫は手嶋増男の三男であるが、のち乞われて城内八幡宮の祀職宮地伊勢守の養嗣子となつて宮地姓を襲うことになったので、直接名門宮地三家の血統をついではいないが、養家に入つて伝統の玄学をつぐとともに明治の大御代にふさわしい新しい神仙の学を形成し、一家をなすことになった。

明治二十一年四十一歳で宮内省掌典となり、大正七年七十一歳で帰幽されるまで、三十年にわたり掌典として宮中の祭祀に奉仕されたのであるから、その神祇な祭祀を通してその本質を窮めるには絶好の恵まれた地位にあるが、その特色は宮中の祭祀に通曉されたばかりでなく、その中に一貫して流れる脈々たる神霊と一つになつて、君子不死の国の信仰が凝結し、それを証明する方途としてライフ・ワーク『本朝神仙記伝』（十冊）をかきあげられたことである。嗣子威夫氏はこれを傍で見えいられたと思われるが、その言葉に「本記伝は……前後三十余年の間、全精力を傾注し、殆ど寢食を忘れて、最善の努力と、あらゆる犠牲を以て編纂いたしましたもので、謂わば父の心血結晶の稿本であります」とある通り、殿夫翁の代表的名著と申して差支えない。

このライフ・ワークも生前には上木できず、そのまま筐底ふかく蔵されていた。本書の第一冊から六冊まで、稿本に目を通されたのは学習院長乃木希典大将だけであつた。院長から翁あての書簡が一通宮地家に保存されている。

拝啓

昨日尊来之節は失礼いたし候 多罪々々 拝借之第一第二兩卷返上仕候 三四之巻は今暫御猶豫奉願候 其砌御
噂之人名別紙ニ而御承知相願候 右得御意度 勿々如此候 頓首

十二月廿七日

希典

宮地賢台 尊下

これによれば、乃木將軍は本書を魂読されるとともに暗々裡に本書の精神を体得されていたことがわかる。明治四十五年七月三十日明治天皇崩御、諒闇となる。その八月中旬將軍は宮地家を訪れ、家藏手沢本『中朝事實』を翁に渡して「特に読んで貰いたい」と申された。「あの時は即ちこの中朝事實を私に片身として渡されたという事は、九月十三日の夜に殉死の報を得たその瞬間に於て、將軍の誠心が全身に込み亘って感激した次第である」と翁は述懐している。本書は將軍の手沢本で、表紙の隅に子爵乃木藏書と刻した印があり、中はいく度か繕見された見え、大分穢なくなっている。宮地家の家宝として保存されているときく。

六

以上の要旨をつぎにまとめてみよう。

さきの星野掌典の論文に「古史伝か文学か」という宮地翁の指摘が見えるが、これは玄学方面の継承を同学の友として深く期待した言とみるべきで、二者択一を申されたものではないと思う。古史伝の統修（二十九卷から三十七卷に至る。うち二十九卷上・中・下は大嘗祭の卷）はすでに鉄胤の委嘱をうけて矢野玄道が明治二十年完成している。そしてこの完成に玄道は彼の全霊を傾けた。脱稿帰郷して間もなく歸幽した事實はこれを物語る。

いうまでもなく玄道は古典学に通暁して神典翼、皇典翼をはじめ国史に関する名著が多いが、また一切経の校合をしたというほど仏学にも通じていた。漢学は古賀侗庵について学び、昌平黌の英才でもあった。玄道の国学史上の地位について清原貞雄博士は、彼の説は宣長や篤胤を祖述したままであるが、只その古道、惟神の道を実際の政治に施

さんとして、ほぼ其目的を達し、宣長以来復古国学者が理想としていた所を、玄道に至って半ば実現することができたから、この点で彼は国学史上特筆すべき人である、と述べているが、妥当の評価と申すべきであらう（『国学発達史』三八八頁）。

ところでここで注目されるのは、玄道には宮地殿夫翁が志した本朝神仙記伝に先行する神仙伝があったということである。無窮会神習文庫に『皇朝神仙記』と題し、春・夏・秋・冬四巻を一冊にまとめた写本がある。平朝臣玄道謹記とあり、春の巻三五丁、夏の巻四三丁、秋の巻一六丁、冬の巻四九丁、計一四三丁でこの中に七五人の神仙の伝記が収めてある。春の巻に最初に登場するのが御毛沼命つぎに稲水命となっている。夏の巻二十一番目に長清道士の記事が載っているが、始めに「此は画工鈴木我古といふ人の集記せるよしにて、平田延胤ぬしより借りて、写させつる也。図もあり云々」とあって、平田延胤の蔵本であったことがわかる。延胤もこの方面に興味をもっていたことが知られる。すると神仙伝の企図は平田門下の一統が秘かに懐いていた構想であったと推測できる。ただ問題は、どこに焦点をあわせ、神仙の本質をきめるかという価値の問題になってくる。

玄道は師なきあと、門下一統から推されて古史伝の補足完成をしあげた碩学である。そしてさらに玄学―神仙道についても皇朝神仙記を一応まとめたという点からすれば、玄道より二十四歳も後輩にあたる宮地殿夫が、平田翁最後の目的が「靈的生活の無限の向進」にあり、と断定するのは歴史的にいえば、些か早計すぎる憾みがある。玄道には、神仙伝のほかに弘妖纂語という著書がある。未見であるが、弘妖の書名でほぼ内容が推定される。

こう考えてくると、問題は宮地殿夫翁の平田神道に対する価値判断にかかってくる。翁のライフ・ワークが『本朝神仙記伝』であるとすれば、この記伝の中に翁が何を意図されたか、という深意がうかがえると思う。再言すれば、翁の神仙記伝に対する原点がなんであつたか、という底辺を探ることができる。『本朝神仙記伝』著述のさい、翁は玄道の『皇朝神仙記』を参照している。しかしこれに満足せず、別に稿を起して大著をまとめた。見解の相違がある

からで、神仙得道について翁には翁として独自の立場があつたからである。翁の著書は玄道のそれとほぼ同一の神仙をあげた点で共通点もあるが、肝心なのは巻首にあげた神仙が根本的に違つてゐることである。即ち巻一の劈頭をかざるのが、

饒速日命

である。これは玄道の著には全然見えぬ。この条は、命が皇祖天神から天璽十種の瑞宝を授けられ、鎮魂の法を伝え給うたからである。このことは全篇を貫く根本精神であり、さればこの条の記事がその大関節となる。翁はこのことを本書の中で特に強調しているのが注目される。

「此神仙記伝の巻首に挙げたるは、本伝に載せたる如く、此命は、皇孫瓊々杵尊の御兄に坐まして、皇孫尊の天下に君臨し給ひし後、更に天降給ひしかど、彼皇祖天神より授かり給へる、鎮魂の法を修めて長生し給ひ、皇孫尊の御皇統は、御四代を歴させられて、神武天皇の御世に至らせ給ふまでも、生存へて御座しは、謂ゆる神仙に非ずして何ぞ。且其終る所の詳ならざるも、亦神仙たるを証するに足るべし。(中略)

——而して此三種と十種とは、即ち鎮魂の秘旨を含め給へるものなり。長生の道を修むるの要妙なるものなり。道家の修真秘訣と相一致するものなり。(下略)」

これを精読玩味すれば、何故に翁が饒速日命を劈頭にかかげられたかの深意を察することができよう。

この点は本論で詳しく触れたいと思うので、ここでは両書の価値判断の相違をあげるに止めたい。

(以下次号)